



TITLE:

近世絹織業の分析視角

AUTHOR(S):

堀江, 英一

CITATION:

堀江, 英一. 近世絹織業の分析視角. 経済論叢 1942, 55(2): 241-247

ISSUE DATE:

1942-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131699>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷五十五第

月八年七十和昭

論 叢

全體主義的經濟論理……………

經濟學博士 柴 田 敬

戰時船舶全面的徵發への行程……………

經濟學士 佐 波 宣 平

強制カルテルについて……………

經濟學士 靜 田 均

時 論

世界的論理の轉換者日本……………

經濟學博士 石 川 興 二

研 究

マルサス『人口論』の人間觀的基礎……………

經濟學士 白 杉 庄 一 郎

二つの型の現金殘高……………

經濟學士 一 谷 藤 一 郎

フランス植民帝國の問題……………

經濟學士 河 野 健 二

說 苑

近世絹織業の分析視角……………

經濟學士 堀 江 英 一

附 錄

彙 報

説苑

近世絹織業の分析視角

堀江 英 一

商品經濟は徳川時代とくにその中期以降著しい發展をしめし、全國的な商品流通さへ見られるに至つた。

絹織業もかゝる一般的商品經濟發展の例外をなすものでなく、まづ近世初期には西陣が、近世中期以降には丹後・桐生・長濱・岐阜などが、近世末期には足利・米澤・伊勢崎・八王寺・秩父などが絹織業の機業地としてあらはれた。わたしは近世に著しく發展した絹織業における商品經濟の構造を説明しようとするものであるが、それにさきだつてこれを説明するための分析視角を決定して置くことが是非とも必要である。しかもかゝる分析視角に歴史的な客観性と歴史的な具體性をあたへるためには、その分析視角は近世における一般商品經濟の發展そのものから抽出されなければなら

近世絹織業の分析視角

ない。

I 「マニファクチュア論争」の論點 近世封建體

制の埒内における商品經濟、從つてまた商品生産の發展段階を規定しようとする企圖は、當然近世封建體制の埒内において、いかなる構造で、またいかなる程度に、資本主義的生産様式が發展してゐたかと云ふ問題の解明に歸着する。ところでこの問題は單に近世經濟史の中心問題として重要であるばかりでなく、明治維新の歴史的性格を決定するものとして、現代史の立場からもし是非とも解決しなければならぬ問題である。

といふのは、もし資本主義的生産様式が近世封建體制の埒内で支配的地位をしむるまでに發展してゐたとすれば、明治維新は當然資本の指導のもとに行はれた變革として解釋されねばならないし、これに反し資本主義的生産様式の發展が未成熟であるとすれば、明治維新は云はゞ「至上命令」に基くものとして理解されねばならないからである。かくして近世における商品經濟、從つてまた商品生産の發展段階の問題は現在の我

々の問題を含んでゐるのである。

服部之總氏と土屋喬雄氏との間の所謂「マニユファクチュア論争」は幕末開港以前における商品經濟・商品生産の發展段階を問題としたものであり、近世絹織業の分析視角を決定しようとする今の場合にも、一應この論争を検討して置く必要がある。この「マニユファクチュア」論争の論點は次の三點に要約しうる。¹⁾

論點の一。論據の問題。服部之總氏は資本主義的生産様式、こゝではマニユファクチュアの成立のためには必ずしも外國市場を必要とせず、従つて鎖國日本の境内でも「嚴密なる意味に於けるマニユファクチュア時代」は成立しうると主張されるのであるが、これに反し土屋喬雄氏はマニユファクチュアの成立のためには是非とも外國市場が必要であり、従つて鎖國日本のもとはマニユファクチュア時代なるものは存在し得ない」と主張される。こゝで問題になつてゐるのは、マニユファクチュア、一般に資本主義的生産様式のために外國市場が必要であるかどうかといふ問題であり、

學說史的に云へば恐慌理論におけるジャン・バチスト・セイ、ジュームズ・ミル、リカードとマルサス、シスモンディとの對立、十九世紀末葉ロシアで行はれた價值實現論争における對立と同じ性質をもつ問題である。

論點の二。發展段階の問題。右の對立からして、當然兩氏の幕末開港以前における資本主義的生産様式の發展に對する評價が異つてくる。服部之總氏は幕末開港以前の發展段階を「嚴密なる意味におけるマニユファクチュア時代」すなはち「マニユファクチュアが資本制生産方法の支配的形態となつてゐる時代」と規定されてゐる。尤もこの場合、服部之總氏の所謂マニユファクチュア時代は手工業・問屋制工業・マニユファクチュア・工場なる發展段階説におけるマニユファクチュアを意味するものでなく、マニユファクチュアは常にその外業部として所謂家内労働を伴ふといふ意味でのマニユファクチュアを指してゐる。之に反し、土屋喬雄氏は幕末開港以前の發展段階を手工業・問屋制

1) 兩氏の論文はそれぞれ服部之總：維新史の方法論、昭和9年、土屋喬雄：日本資本主義史論集、昭和12年、第2編工業史の諸問題。に集録されてゐる。

工業・マニユファクチュア・工場なる發展段階説における問屋制工業と規定される。

論點の三。明治維新の問題。以上の對立からして、兩氏の明治維新に對する理解が異なるのは當然である。

服部之總氏はもと／＼明治維新理解のために幕末マニユファクチュア時代説をたてられたと思はれるのであるが、土屋喬雄氏はこの論争においてこの論點に觸れることを避けてゐられるし、またこの論點に關する對立は既に述べたところから自明であるので、こゝでは詳述する必要はなからう。

本來この論争は幕末開港以前にマニユファクチュアがどの程度に存在したかといふ歴史的實證を中心とするものであるが、この問題はのちに取扱ふこととして、こゝではマニユファクチュアを發展せしめるやうな經濟的基礎が幕末開港以前に成熟してゐたかどうかを検討して見よう。

マニユファクチュアは、イギリスについて充分證明されてゐるやうに、農業生産力が發展した結果、農奴

階級の全剩餘生産物を喰ひ盡してゐた封建貢租が相對的に減少し、農奴階級の手に残餘生産物が残ると云ふ場合に發展するものであり、従つてマニユファクチュ

ア時代なるものは農村の近代化を基本的前提とするものである。たとへばイギリス毛織業におけるマニユファクチュアの發展がヨーロッパ階級の成長と結びついてゐるのはこれがためである。かくして自生的に資本主義化したイギリスの場合には、農村の近代化とマニユファクチュアの發展とが相對應してゐたのである。²⁾

ところでこの「マニユファクチュア論争」と時を同じくして展開された兩氏の農村問題に關する論争は、「マニユファクチュア」論争とは不思議にも何等の關聯もなく行はれ、「マニユファクチュア論争」とは全く別個に行はれた。しかも兩氏の農村問題に關する論争と「マニユファクチュア論争」とを對照するとき、こゝに奇妙な結果がでてくる。といふのは、我國農村における封建性の存続乃至強化を主張される服部之總氏が却つて幕末マニユファクチュア時代説をとられ、所謂

2) 大塚久雄；歐洲經濟史序説，昭和13年，後篇參照。

3) これに關する兩氏の論文は服部之總；維新史の方法論。土屋喬雄；日本資本主義史論集，第1篇農業史の諸問題。に集録されてゐる。

「新地主」の發生・地主手作のうちに我國農村の近代化を發見せられる土屋喬雄氏が幕末マニユファクチュア時代説を却け問屋制工業時代説をとられるからである。換言すれば、服部之總氏においては農村近代化の否定とマニユファクチュア時代の肯定とが結びつき、土屋喬雄氏においては農村近代化の肯定とマニユファクチュア時代の否定とが結びついてゐるのである。

わたしはこゝで兩氏の所説に正否の判定を下さうとするものではないが、然したゞこゝでわたしは兩氏が外國貿易の存否を論據とすべきでなく、マニユファクチュア問題と農村問題との基本的連繋の解明を論據とすべきであつたことを指摘したいのである。外國貿易の存否の問題はこの問題の派生的側面にすぎないからである。わたしは「マニユファクチュア論争」を検討することによつてマニユファクチュア問題と農村問題との基本的連繋にまで辿りついたのである。

II 近世商品經濟發展の構造

ところで我國においては、近世封建體制の埒内で農業生産力が發展し、

そのため封建貢租が相對的に減少して農奴階級の手許に剩餘生産物の一部が残留して、そこに「自由な農民」が發生し、或はまた資本主義的農業經營が發生したと考へることは困難である。近世中期以降の農民分解は寧ろこれとは全く反對のつぎの諸過程によつて行はれたと考へられる。

過程の一。農村における階級分化の基礎。近世の武士階級は、兵農分離の結果、城下町に結集され、城下町に結集された武士階級はその必要上町人(工・商)階級をも城下町に結集した。武士階級は、一方に農奴階級から封建的支配關係により全剩餘生産物に達する貢租米を徴收し、従つてこの限りに於いて農村の自然經濟に依存し、他方にこの貢租米を販賣して必要品を購買し、従つて城下町の商品經濟、従つてまた町人階級に依存してゐた。ところが武士階級がかかる二重生活とくに町人階級の寄生のため窮乏するに従ひ、彼等の農奴階級に對する封建的支配關係は強化され、封建貢租はさらに農奴階級の必要生産物の一部すらに喰込むに

至る。従つてこゝでは土地を所有する所謂本百姓は決して「自由な農民」ではあり得ない。農奴階級は再生産を繼續できず、土地を賣却せざるを得ない。

過程の二。農村における階級分化の形態。かくして賣却される土地は、上述した如く剩餘生産物を生み出し得ない土地であり、従つてそこから資本家的利潤の成立する餘地のない土地である。そこで、所謂「新地主」が徵收する地代は封建賃租が喰ひ残した必要生産物の一部であり、それは超過利潤の轉化形態たる資本主義的地代ではない。かくして農民分解は農業生産力の發展を動因とせず、農業における資本主義化の結果せずして行はれたのであるから、土地を喪失した農民は農業から追放されるどころか、却つて小作人として土地により強く結びつけられざるを得なかつたのである。

ところで封建的壓迫のため、その再生産の繼續を困難にせしめられながら、土地に結びつけられてゐた農奴階級はどうすべきであつたらうか。元來農地には制

限があるし、また單位面積から最大の地代、最大の生産物をうることを目的とし、従つて勞働の最大限の集約を行はんとした封建的生産様式のもとでは、勞働力にはあり餘るほど存在した筈である。従つてかゝる状態のもとに置かれた農奴階級は、かゝる過剰な勞働力を利用し、さらに勞働を強化して、商品生産とくに手工業生産に赴いたのである。かくして近世中期以降著しく發展した商品生産は、農奴階級が農業上の再生産を補充するために農村副業として営まれたものであり、従つてマニファクチュアといふやうな正常的な商品生産ではあり得なかつたのである。マニファクチュアに代つて、農民副業の資本による制覇、農村副業の資本による編成が發展した。わたしはそれを分散的マニファクチュアとよぶこととする。

かくして近世中期以降發展した農村副業、換言すれば分散的マニファクチュアに對する市場は、かゝるものゝ發生過程そのものうちにあたへられてゐる。それは二つの方面から來る。その一は、農奴階級から

増徴された貢租米の追加分および新地主の取得した現物地代であり、その二は、これが重要なのであるが、農村副業における社會的分化である。といふのは、農村の自給生産とくに手工業品の自給生産が解體すれば、その限りにおいて農奴階級はお互に自己の生産物を交換しなければならず、お互に購買力を與へあふ關係に立つことになるからである。さらに進んで、資本により制覇された農村副業、たとへば賃機のやうな場合には、農奴階級は自己の生産する生産物さへ購買しなくてはならないであらう。

かくして「マニユファクチュア論争」に對するわたしの立場はかうである。服部之總氏における農民近代化の否定とマニユファクチュア時代の肯定との結合、土屋喬雄氏における農村近代化の肯定とマニユファクチュアの否定に代るに、私は農村における封建性の強化と分散的マニユファクチュアなる時代を結びつけるのである。

III 近世絹織業の分析視角

上述したやうな一般

商品經濟發展の構造を、絹織業の構造を分析することによつて確證しようとするのが、以下の近世絹織業の分析についてのわたしの課題である。その場合、上述したところからして當然相關聯する二つの分析視角が與へられる。

分析視角の一。生産構造の問題。分散的マニユファクチュアは二つの側面をもつてゐる。その一は、手工業的商品生産が農村副業として營まれつゝ、その農村副業的手工業者の間に階級分化が行はれ、そこに資本の直接生産者に對する支配が確立されてゐることであり、この側面は分散的マニユファクチュアの間屋制工業的側面とよぶことができる。これは分散的マニユファクチュアの云はゞ資本的性格の規定である。その二は、資本によつて支配される農村副業的手工業者相互の間に分業と協業の關係が確立され、資本の生産力の發展が見られることであり、この側面は分散的マニユファクチュアのマニユファクチュアの側面とよぶことができよう。これは分散的マニユファクチュアの云はゞ技術的性格の規定である。かくして分散的マニユファクチュアは我國近世における農村の封建性のうへ

に芽ばへたマニユファクチュアの畸形兒である。そこで近世絹織業の生産構造は、この視角から分析され、規定されねばならない。

分析視角の二。市場構造の問題。分散的マニユファクチュアは、市場範圍から云へば、マニユファクチュアと同じ市場範圍を要求する。といふのは、分散的マニユファクチュアは、資本の側から見れば、マニユファクチュアと同じく大量生産のための生産方法であるからである。分散的マニユファクチュアの要求することの市場範圍は二つの側面、すなはち武士階級および新地主が農奴階級から徴収する貢租米の追加分、農奴階級における社會的分化を源泉とする農村の購買力から生ずる。ところで前者から構成される市場はその性質上高級的・奢侈的市場であり、後者から構成される市場はその性質上低級であり、大衆的である。そこでこの視點から市場構造の變化を知ることができる。わたしはこの視角から近世絹織業の生産構造が必要とする市場範圍を推定することにする。

私はこの分析視角をよりよく徹底せしめるために、できるだけカメラの絞りを小さくして深度をふかめることに努めるであらう。